第3期第11回講座

311 次世代塾 伝える／備える

人・地域 つながり大切

行場商店 浪板虎舞 再生への道のり知る

東日本大震災の伝承と防災の担い手育成を目的に、河北新報社などが開く通年講座「3.11『伝える／備える』次世代塾」第3期の第11回講座が14日、仙台市宮城野区の東北福祉大仙台駅東口キャンパスであった。「なりわい・地域再生」をテーマに、宮城県南三陸町の水産加工会社「行場商店」社長の高橋正宜さん(58)、気仙沼市の浪板虎舞保存会会長の小野寺優一さん(75)が講師を務めた。

東日本大震災の津波で被災し、再建中の行場商店の工場＝2011年6月、宮城県南三陸町

行場商店は2011年3月、震災の津波で2工場が全壊し、被害総額は約10億円に上った。販路を維持するため、被災の2週間後、9月の秋サケ漁までの事業再開を宣言。高橋さんは従業員70人が全員無事だったことや、被災した企業の施設復旧を支援する国のグループ化補助金と企業地震保険に支えられ、8月に操業再開できた経緯を説明した。

小野寺さんは、気仙沼市浪板地区に約300年前から伝わる伝統芸能「虎舞」の保存会活動に関わってきた。地区は壊滅的な津波被害を受け、住民約30人が犠牲となり、虎舞も存続が危ぶまれたという。

しかし、震災から2カ月後、米国の高校の支援をきっかけに活動を再開。「被災した地域を立て直すために、子どもをはじめ、まずわれわれが元気になって、その元気を地域の人たちに届けようと考えた。舞う人、見る人が復興への思いを分かち合った」と訴えた。

グループ討議の後、学生らから「取引先や地域など横のつながりに加えて、これから生まれてくる世代への縦へのつながりも考えないといけない」「伝統芸能が復興に果たした役割を聞いて、被災者が演じるからこそ与えられる元気や勇気があると感じた」といった意見が出た。

発言を聞いた高橋さんは「人間一人では生きていけない。みなさんには人々が手と手を取り合える社会を築いてほしい」と期待した。

○行場商店社長
高橋正宜さん

証言
- 津波で工場全壊。従業員は70人全員無事
- グループ化補助金、地震保険が支えに

訴え
- 再生の原動力は従業員の命
- リスクに向き合い、備えることが重要

○浪板虎舞保存会会長
小野寺優一さん

証言
- 津波と火災で地域は壊滅的被害
- 活動再開、人と地域つなぐよりどころに

訴え
- 伝統芸能が地域再生の大きな力になる
- 地域づくりには若者の力が必要だ

受講生の声

担当の東北福祉大インターン生は次の通り（敬称略）。3年内村大樹、橋坂耀、橋本瑚都

子どもに伝承へ

講師2人に共通するのはつながりを大切にする姿勢でした。来春、教師になります。震災を知らない子が増え、自ら判断し行動する力をつけることの重要性も増します。次世代に震災の教訓をつなげたい。（仙台市青葉区・宮城教育大4年・小檜山瑞葉さん・23歳）

教訓の発信担う

伝統芸能で他者を元気づけ、自分たちの心の回復につなげた話、社長と従業員で復興を目指した話に「つながり」の大切さを認識しました。そのことを震災を知る私たちが発信する必要があります。（仙台市宮城野区・東北工業大2年・阿部佑亮さん・20歳）

支援 工夫が必要

被災企業を支援するグループ化補助金の話が印象に残りました。必要な人がなるべく早く平等に活用できる工夫が必要です。伝統芸能は人のつながりを強くします。地域との関わりを深める大切さも知りました。（仙台市青葉区・宮城大3年・浅見茉那さん・21歳）

メモ　311「伝える／備える」次世代塾を運営する推進協議会の構成団体は次の通り。河北新報社、東北福祉大、仙台市、東北大、宮城教育大、東北学院大、東北工業大、宮城学院女子大、尚絅学院大、仙台白百合女子大、宮城大、学都仙台コンソーシアム、日本損害保険協会、みちのく創生支援機構。